

道立厚岸自然公園と野付風蓮自然公園

北海道自然保護協会の井手、伊藤、籠山、鳥倉、渡辺の五理事は、北海道林務部の小林部長、同斎藤生物保護指導官らとともに昭和四十年十一月十九、二十三日の間

(一) 厚岸道立自然公園のアイカッブ岬から、あやめが原にいたる間の風致維持に留意した利用施設の規模、および配置方法

(二) 野付風蓮道立自然公園における白鳥と、公園利用者の結びつけ方法
につき検討するため、現地を視察した。
一行は二十日朝、厚岸町の助役さんと厚岸営林署の方々の案内で、音に聞く道東の秋晴れと予想外の暖かさ（晴れた日中だけの由）に驚きながら、真竜から対岸の厚岸本町へ渡る。厚岸湖と厚岸湾の境を走るフェリーボートは以前のとは見

違える新型で、夜明けから日没後まで厚岸側からは毎時〇分と三十分、真竜側からは十五分と四十五分に出帆、人は無料、車は有料になっていた。

厚岸の市街を南へ通り抜け、かなりの急坂を電光形に少時登ると、道有林内に昨年つくられた広い駐車場があった。ここから先のさく内はアイカッブ岬まで、北海道から北大が借り受けた土地で、林内歩道の両側は、激しい潮風に耐えてきた珍しい姿のシラカバを主とする林。しばらく進んだ右手に、規模は大きくないが博物館、そこから西北へ降りた海岸に水族館がある。水族館とむねつぎの北大理学部付属臨海実験所は、寒流に住む動物の研究で名高い。

アイカッブ岬の展望台は、一昨年建造されてかなり大きく、北および西に紺青

の厚岸湾と対岸の山、南には大黒島と小島が見えて遊心をそる。西南方の床潭の海岸には赤や緑の漁家の屋根、白や褐色の小舟が、双眼鏡の視野にくっきりと浮かぶ。

この岬を後に、いったん厚岸の市街へもどり、別な道をまた南東へ進んで道有林内をあやめが原へ向かう。途中二、三排水不良の箇所があったが、トラックの往来は少なくないように思われた。林内のシラカバ、ダケカンパのほか、樹齢約三十年というトドマツの人工林がことごとく美しく、貴重なものに感じられた。山火防止に、遊覧客の特別の関心と協力を呼びかけたものである。

あやめが原は太平洋に臨むがけの上のなだらかな広い岡で、春から夏に来遊する人々が多いといわれ、周辺のがけ縁にさくが設けられてあるのは良い心づかいと思われた。しかし、アヤマが一面に生えた広い野原に、空ビンヤその破片が多く散乱していたのには感心できない。また、ここにある展望台のようなものは、木造で小さく、子どもや老人が上るのには向かない。

厚岸自然公園の利用施設について感じたことは、つぎのとおりである。

(一) 道路——アイカッブ岬からあやめが原へは、厚岸市街を迂回しなく、いいように、林内歩道の一部を車道に拡幅すること。

また、すでにある車道の排水不良の個所は改修すること。

(二) 駐車場——あやめが原の入口付近にこれを設け、それから先へは自動車を持ち入れぬようにすること。その大きさは、アイカッブ岬の手に既設のものくらい。

(三) 展望台——アイカッブ岬にあるものの半分くらいのを、あやめが原の東と西の縁に近いところに一つずつ設ける。

(四) 公衆便所——上記の展望台と一体にして、やはり二カ所に設け、厚岸町でその清掃管理に責任をもつ。

(五) くずかご——アイカッブ岬に二、三個、あやめが原に六、八個配置する。

(六) キャンプ場——設けないほうが良い(火防上ならびに衛生上の見地から)。

(七) パスの便——定期、または臨時のバスの便をよくすることで、キャンプ場のない不便を解消するほうがよいと思われる。

あやめが原から再び厚岸市街へもどり

真菘、糸魚沢、茶内、浜中を回って「霧多布泥炭形成植物群落」地帯をぶくむ高山植物の原生花園と、タンチョウヅルの

住む湿原を右に、大規模な防潮堤を左に見ながら快走して霧多布に着いた。ここはチリ沖地震の余波で島になった由であるが、市街の裏の湯沸山には、ほど良い

位置に展望台が本年つくられ、その下に公衆便所も付設されていた。その汲み取りは町の清掃車で行なう予定という。

展望台の西南に浜中町が設けたいという駐車場は、その位置も規模も適当と思われた。

湯沸岬にある灯台周辺の海はクジラその他の好漁場、晴れていたので眺望は絶佳、オオセグロカモメ、ウミウなどのしぐさも見あきぬものであった。

霧多布と北海道本島を結びつばな橋を北西へ引き返して西南へ進み、琵琶瀬高台から北のほうを見おろすと、一望二〇〇haの大湿原と、そこに散在する大小の沼、ゆるやかに蛇行する川の眺めは

たしかに東北海道らしい雄大なもの、春夏秋冬の花の季節にはさぞかしと思われたが秋の景色もすばらしかった。ここにも展望所その他の設置が計画されているのは

妥当と思われたが、高く目ざわりなものを

をつくることは避けられるほうがよいであらう。

ここから北東へもどり、浜中を再び通って厚床を経、根室へ向かう。道の左右に去来する野草の淡褐色と晴れた空の対照、道東の秋の意外な美を饗嘆する声もしきりであった。途中、別当賀で少憩、

風蓮湖の向こう岸近くに数十羽のオオハクチョウとカモがすでにきているのを双眼鏡で眺め、夕刻根室に着いて一泊。シマエビ、ハナサキガニの新鮮なものを味わう。

夜は根室市の愛鳥家、猟友会長・岡清松氏(本年自然保護の功績で農林大臣賞を受賞)苦心の作にかかるハミリカラー映画二本(友知島で撮影されたエトピリカと、風蓮湖で撮影されたオオハクチョウ)を見せていただき、また根室市水道の水源地位近に住むタンチョウヅル一つ

がいの保護に関する苦しい経験(一昨年は中学生に卵を取られ、昨年はカラスに卵をこわされた)、将来への対策などを承った。

十一月二十一日は早朝から折りあしく雨模様だったが、上記タンチョウ生息地の南、アヒル養殖場(白鳥の保護療養を

引き受けてくれる病院)の北を通って、

花咲半島の東端ノサップ岬を訪れた。途中の乳牛(おもにホルスタイン種)と役用馬(釧路種に近い根室種)の放牧場は

画心をかき立てる風景であった。

ノサップ岬の北隅に設けられた展望台の位置(海にやや近すぎる)は、やむを得なかったとしても、その下に設けられた公衆便所は清潔とはいえず、その維持管理のむづかしさを物語っていた。これはしかし根室市が観客の来訪を望むならば、軽視できない問題と考えられる。

色丹その他の島々に尽きぬ思いをさせつつ東へ引き返し、別当賀でまたしばらく白鳥を観察した。かれらは風向きによってこちら岸へ集まることもあり、近年は危害をくわえられないことを知って、

年々人を恐れなくなりつつある由。この朝も望遠レンズを携えた愛鳥家がバイクできていた。

羽数は昨夕刻とほぼ同じ数十羽程度、これが万余に増加するのはこれからで、

湖面の大部分が凍り、こちら岸へ白鳥の群れが接近するのは二月末から三月上旬という。そのころは湖面の凍結でかれらの好むアマモが得難くなり、空腹や負傷のため弱ってたおれ、カラスのえさとな

るものもある由。ただ幸運なものが人に救われ、前記の白鳥病院で手当てを受けるという。病院では菜類を刻んで水に混ぜたものを与える由であるが、茶ガラよりもエンバクを好むという人もある。

つがいの親が二羽の幼鳥を間には喜んで縦列をつくり、ゆっくり一直線に西へ進むなどのあきぬ眺めであったが、一行は東へ進み、厚床から北折して風蓮川、ケネヤウスベツ川、ホンヤウスベツ川を渡り、風蓮湖の北岸に接する、「一本なら」で下車。ここでも十数羽のオオハクチョウを観察、珍しく太い一本のナラの老木を思い思いに撮影した。

この付近にもし観光客の来訪を待つとすれば、火防上の配慮、駐車場、展望所（下記）便所などの設置と、その後の十全な清掃、管理が望まれる。もちろんこのために、美しい樹林が荒廃することのないよう、切に望みたい。

一本ならから再び湖岸を離れて北東へ進み、西別川の右岸に沿うてオホツク海岸の別海市街にいたり、ここから南進して走小丹を過ぎ、一本木で三たび風蓮湖畔に出た。ここは対岸が近く、小舟を借りて、潮切りへカレイ釣りにも行ける漁村、数羽のオオハクチョウが声高く鳴い

ていた。
一本木から北へもどる途中、三羽のオオハクチョウが編隊で飛来、一行の上空を半旋回したので、カメラで歓迎に答える人も多かった。

北進をつづけて西別川、床丹川を渡り春別に着く。春別川の川口は厳冬にも凍らず、えさを求めてここへ集まるオオハクチョウに野付中学校生徒がえさを与えるいは氷を割ってアマモを食べやすくしてやるので年々慣れ、人を恐れなくなりつつあるのは喜ばしいことである。

野付半島と国後島を右手に見ながらさらに北上し、尾岱沼市街で昼食。ここは根室にもまさるシマエビの産地、色とりどりな三角帆の漁船は画にしておきたいものであった。
みぞれ混じりの風の中を、無事故二十五年で表彰された運転手さんのドライブで、秋枯れの野付半島を南東へ下がり、エキタラウスに着く。横なぐりの風雪が強まり、カメラには気の毒であったが、オホツク沿岸のきびしい冬の訪れをせわしく撮影し、帰路につく。道の両側に果てしなくつづくハマナス、ミズナラ、エゾノコリンゴなどの群落が、印象的であった。

標津から海岸を離れて東へ進み、中標津へ近づくころ雪はやんで、夕空に標津岳がくつきり浮かび、明日の晴天を予告するかのようであった。

野付風蓮道立自然公園へ白鳥を見にくる冬の観光客に便宜を図る方法としては
(一) バスの便を良くし（厚床、根室から別当賀へ、また標津から浜春別へ）。
(二) 駐車場を風致を害するおそれのない場所に設け（別当賀と浜春別に）。

(三) 展望所。
(四) 公衆便所も設ける。
(五) 遊覧船を湖上に浮かべることも将来考える。

などの行き方があろう。
展望所は、特別に高いものは設けないほうがよろしかろう。階段など冬期はすべる危険が多いから。風致をそこねないような位置と形を選び、屋根、壁、窓を設けて、内部の人の動きが白鳥には見えない構造とすればいちはんよい。清掃管理と、積雪期には除雪も行きとどくよう配慮されることが必要と思われる。

このような施設はまず別当賀に設けてみて、結果が良かったら、浜春別にも増設されるのが適當ではなからうか。一本

ナラに設けるのは、むしろ避けられたほうがよいであろう。
遊覧船は風蓮湖の場合、別当賀（までバスの便を設ける）と一本木間、そして尾岱沼の場合は浜春別と尾岱沼市街間を風の穏やかな日に限り時間をきめて運航するのがよいかと思われる。いずれの場合にも船の速さはごく小さく、船内の人の動きが白鳥には全く見えないようにすること、および騒音を発しないことが必要であろう。三角帆の船が適當かと思われる。

なお、自然公園内に紙片、空ビン、空カンなどを捨てるのは良くないこと、他人が捨てたものでも大勢の者が協力して拾い、くず入れにおさめればさほど手数がかららず、しかも公園内がきれいになることをまず児童、生徒、学生たちに教えて実行に移し、戦中、戦後の混乱期に育ったおとなたちは、これを見習うように仕向けることも、良い環境づくりの一つではあるまいか。

（島倉亨次郎）